

朝



さあ登ろう。

初日の朝、8:30受付開始。

7:00前から始まった先陣争いで、定刻30分前には、
すでに30名以上の入国希望者が西9号館5階に列をつくりました。

8:45 60名分の王国ビザは すべてsold out!

史上最速で王国樹立を達成した国民のみなさまの奮闘を
心より期待します。

まじょ&TA一同

www.columnland.net/

にて作者さん&読者さんの声実況中

希望

例えば、地平線から漏れ出す

黄金色の光条が

僕に与えてくれるもの

旅立ちの朝

にっしょく【日食】 太陽が月の影に隠される現象。

影に隠されていた太陽が、影の端から僅かに顔を覗かせる。

漏れ出た光の宝石のような輝きに、俺はいつの間にか目を奪われていた。

美術館にもジュエリーショップにも興味の無い俺だが、シンとした無音の空間に浮かぶその輝きは、ただ素直に美しかった。

『Eブロック、どうした。作業が止まっているぞ。』

イヤホンから響く通信に、俺は我を取り戻す。

「こちらEブロック。日食が見える。綺麗だ。」

『正確には日食では無い。太陽が地球の影に隠される現象、我々が“夜”と呼んでいた物だ。』

「ああそうかい。どっちにしても、やはり綺麗だ。」

『まだ地球を立てて十四時間だぞ。早くもホームシックか？』

「いいや、人類の新しい“夜明け”に祝福してただけさ。」

——西暦2042年。人類初の有人外宇宙探査船、二度と地球に帰らぬ宇宙船内にて。

朝焼けの道化師

思えば、朝焼けの道化師はいつも笑顔だった。私は不明瞭な視界の中、その弧を描く口元を見つけては、彼を彼だと認識して安心するのが常だった。真の名は知らない。彼はいつだったか、自分は道化師、名前はいらぬと、やはり笑って答えたのだった。深くは尋ねなかった。道化師だろうと何だろうと、彼の隣は居心地が良かったのだ。君もよく飽きないねえ、と、彼に言われたことがある。僕は滑稽だろう、そろそろ現実世界へ帰って、日常に戻ったらどうだい、夢の中になんて住み続けるものじゃないよ、と。私は嫌だった。貴方には夢の中でしか会えないじゃない、そう言っただころで、彼は私の頭を撫でて笑うだけなのだ。確か、自分がその人を強く想っていれば、夢の中で相手に会えるのだと言ったのは、かつての都の人々だったか。今なら貴族と一緒にになって、恋の歌でも詠めそうだと思った。畢竟するに、彼のことがどうしようもなく好きで、離れたくなくて、私は夢から覚めなくなってしまったのだ。

それを知っているのに、愛しい道化師は何度も私を現実世界へ返そうとするのだった。彼のお気に入りとなる「朝焼けの道化師」という呼び名も、私を説得するときの彼の常套句をからかって、私が作ったものだ。彼はいつも、現実世界では朝であるだろう時間になると、今帰れば美しい朝焼けが見えるだろう、だから目覚めた方がいいよと、優しく私に告げた。それでいて夕焼けには言及しないのだから不思議だ。どちらにせよ私は拒否するのだけれど、特に朝焼けは雨の兆しと言うから、好んで見ようとは思わなかった。私の頬に雨が降るわ。そう言っしまえば彼は、それ以上は説得して来ない。ただ、たまに頭を撫でて、君は強情だねと零すのだった。

心から、この時間がずっと続いてほしいと願っていた。夢の中には私と彼しかいなかったけれど、逆に考えれば、唯一人愛しいと思える彼がいた。幸せだった。それでも終わりは来る。幕を下ろしたのは、彼だった。

もう限界なんだ、君は夢から覚めなければ。このままでは僕と同様、本当に夢の中から出られなくなる。どうかお目覚め、君にはまだ、夢を漂う亡霊にはなあってほしくない。今までごめんね、そろそろ終わらせよう。君は現実世界へ帰るんだ。そう笑って、呆然とした私にそろり、と手を伸ばし、彼がいつものように頭を撫でた途端、ふっと意識が薄れていった。いや、覚醒、していったのか？

ありがとう、と、彼の声が聞こえた。楽しかったよ。そちらは綺麗な朝焼けだろう。ああ、朝焼けは本当は雨の兆しなんかではないのだけれど、局地的に雨が降ってしまったかもしれないね。この笑顔に涙なんて、本当に道化師の化粧のようじゃないか。君は笑うかな。そうだといい。最後にもう一度、ありがとう。大好きだったよ。だから。

霞かすみの先に

光が瞼を突き抜け、直接瞳へ届いている、
そんな風に錯覚してしまふ、

朗らかな、されど眩い陽の光を一身に浴びつつ、
伸びをすることで、

体はもろろんのこと、脳にも目覚めを認識させる。

私の夢の終わりは決まって、窓から差し込む日の出の光である。

なので季節によって起きる時間は異なってしまう。

目覚まし時計を使えば定まった時間に起きられるかもしれない。

でも太陽が出てくる時間が、生き物の活動の始まりであるべき、
なんて、そんな古臭い考えを持っている訳ではないが、

陽の光を受けて目を覚ますのは気持ちが良い。

それに……

女は二階の自室から、玄関の前を見る。

そこには一人の男が立っていた。

息を切らしたその男は声をあげる。

「おはよう」

女も言葉を返す。

「今日の調子は？」

そう問いかけると、男は無邪気な温かい表情になる。

女はその姿に目を細める。

あまりに眩しすぎるその男を凝視することが出来ず、
しかし目を背けたくなくて。

そして男は声を発する。

「最高」

愛色スカーフ

今朝は、夫の最後の出勤の日でした。

四十余年、毎日ひたすらまじめに勤め上げた会社に行くのも、これで最後。結婚した当初は、夫が退職する日など考えてもみなかったのに、時の流れというのは本当に早いものです。

朝食のお味噌汁を飲みながら、夫はふと、今日は遅くなる、といました。会社の部下たちが、送別会を開いてくれるんだそうで。

思い返せば、結婚してから今まで、職場の愚痴を夫から聞いたことはほとんど無かったように思います。会社勤めには苦しいことも楽しいことも沢山あるのに、一緒に晩酌をしても、いつも穏やかに、私の近所付き合いの愚痴なんかを聞いてくれたりするのです。

そんな夫のことだから、きっと職場でも皆から慕われているのでしょう。いつも通りに背広を整えて、いってきます、と出掛ける夫。

今日の「いってらっしゃい。」には、少しの愛嬌をこめる私。

「あ…。」

玄関を出かけて夫は、急に思い出したように呟きました。忘れ物？と私が返すと、夫は、いや、と首を振り、

「あとで、居間のちゃぶ台の上、見てくれな。」

そう言っ、すたすたと出掛けていってしまいました。

居間のちゃぶ台には、上品に包装された新品の藍色のスカーフ。そしてそばに一枚のメモ書きが添えられていました。

“働く自分を、今までずっと支えてくれてありがとう。”

スカーフを手にとると、その色つやと肌触りのよさに笑みがもれました。ネクタイ一本も自分では買わないような夫が、どうやってこんな洒落たスカーフを買ってきたんだらう。そう思うと、スカーフの深い藍色が、この上なく美しく、愛しい色に思えたのです。

今朝は、夫の最後の出勤日でした。

そして私にとっても、特別に嬉しい朝となりました。

朝

激しい激痛で目を覚ます。

腕を体の下にして寝ていたようだ。

血が通い始めるまで腕をゆっくり伸ばす。

しかし何故夜中に目を覚まさなかったのか。

睡眠中は無敵。

朝になればリセット。

そのリセットに体はついていけない。

そんな事を考えながら朝日を浴びた。

ついききほどまで暗かった空が、少し青く
なっていた。どこからか鳥の囀りが聞こえて
くる。朝が近いのだろう。

そんな清々しさと相反して、地面には、数
え切れないほどの死体が横たわっていた。

【××な陽射し】

およそ夜明けには似つかわしくない惨状の
中、生きている者が一人だけいた。その男は
血溜まりの中に座りながら、まだ夜に分類さ
れる空を静かに見上げている。

今の彼には左腕と左脚がない。正確には、
左半身がごっそり消失していた。赤黒い断面
からは弱々しく律動する心臓が見える。

それでも、そんな状態になっても、彼は生
きている。彼は、この地に残った最後の吸血
鬼だった。

仲間などいない。かつて仲間だった同種の
者達は皆、より良い狩り場を求めてこの地を
去った。

理解者などいない。人間はただ彼を恐れ怖
がり畏怖し、遠ざけ、時には襲い掛かった。

そんな孤独を、何百年耐えてきたのだろう。

いつしか彼は伝説の吸血鬼と呼ばれ、襲い来
る人間すらいなくなっていた。昨日までは。

ふと彼は死体に目をやる。見たことのない
鎧に見たことのない武器。少し離れた所には、
見たことのない乗り物。彼には知る由もなか
ったが、それはとある大国の軍隊だった。人
間の使う武器は、斧や槍から機関銃や大砲へ
と移り変わっていた。

近くにあった機関銃を手に取り、しばらく
眺めて放り投げる。人間がそれを手にしただ
けで吸血鬼に対抗できる力を得るなど、以前

には考えられないことだった。これではどち
らが化け物かわからんな、と彼は嘲った。

その間にも空は少しずつ明るくなっていく。
吸血鬼にとっての日光とは、死そのものではあ
る。今彼が座り込んでいる所にも、その光は
届くだろう。だが、傷つき再生すら満足にで
きない彼は、もう動くことができなかった。

こうして死ぬのかと思い、彼は自らの一生
を振り返ったが、長い長い孤独しか思い浮か
ばなかった。孤独。寒さ。体の震えが止まら
ない。どれだけ長い時間が経とうとも、独り
であることに慣れることはできなかった。死
ぬなら最期にせめて×××がほしい。

だがそんな彼の意など知らず、時は無情に
進む。遠くに見える山の斜面から太陽が昇り、
光が射し、彼を照らした。

初めに感じたのは鋭い痛み。まるで、傷口
を灼熱のナイフで抉られるよう。そして体が
内側から爆ぜるような感覚。あまりの激痛に、
彼は意識を失いかけた。

それでも彼は自我を手放さない。声をすら
上げない。右腕を見ると、そこはまるで砂の
ように崩れ落ちていた。血が止めどなく溢れ
ては蒸発し、白い骨が覗く。おそらく全身が
崩れているのだろう。

容赦なく全身を襲う死の熱量。しかし彼は、
その熱さとは別に、太陽の柔らかな光を微か
に感じた。

その一瞬だけ、彼は痛みを忘れていた。今
までに感じたことのない感覚。やがて痛みが
戻り、狂いそうな頭で理解する。

「これが、暖かさか——」

焼け爛れた顔を、涸れたはずの涙が伝う。
彼は生まれて初めて充足感を味わい、そのま
ま暖かな陽射しに包まれてこの世から消え去
った。

四季の朝

春うらら

ほどよい氣候が

睡夜呼び

気付けば昼過ぎ

正午の朝食

夏休み

昼夜逆転

私生活

朝顔の花を

一度も見れず

秋風と

十五夜の月と

語り明かし

ああこんにちはと

頭痛が目覚まし

冬休み

布団とこたつに

恋すれば

朝に嫌われ

猫に好かれて

コンテスト結果				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
まじょコメント				
01	希望	2 pt	7 位	0 sp
		まさに初日の出気分♪ オープニングにふさわしい壮麗な光景を見せていただきました。		
02	旅立ちの朝	9 pt	3 位	0 sp
		宇宙の朝！その発想はなかったぜと意表を衝かれました。 旅立ちという状況とあいまって、爽やかさ二乗。		
03	朝焼けの道化師	6 pt	4 位	3 sp
		おとなになんか、なりたくないもん！永遠の少女の気持ち。王道ながら、まとめきっておみごと。 そこへ、さらに仕掛けサーヴィスまで追加なんて、まさにカミワザ！ぱちぱちぱち。最多特別賞ゲットです。 特別賞：あなたはピエロで賞（太字がうまい！）/レイアウト賞（レイアウトが口の形という工夫に）/夏休み有意義にすごしたで賞（すごい！） イチオシフレーズ：「そろそろお目覚め、愛しい君。朝焼けの道化師はそう言って笑った」		
04	霞の先に	3 pt	5 位	1 sp
		陽射しとともにゆっくりと目覚めてゆくというていねいな描写は生きていたのですが、うーん、シチュエーションが読めません。どんな男女関係なんでしょ。 特別賞：作者コメントに期待で賞（分からないから。詳細キボンヌ） イチオシフレーズ：「最高」×2		
05	愛色スカーフ	21 pt	1 位	1 sp
		昭和気分のレトロ調。だから藍色＝愛色おとーさんダジャレもオッケー。 いいなあ、この奥ゆかしい夫さん。 現実感が稀薄なところ、ちょっとCM気分で読みました。 初回、幸先よくゴールド・メダルですね、おめでとう!!! 特別賞：うららかで賞（まとまっていて内容もほほえましい）		
06	朝	1 pt	8 位	1 sp
		ちょっとした日常のフシギを「無敵」とか「リセット」とか、ちょいメカっぽいワードで切り取ったところが、いい個性です。イチオシフレーズでも2つの班が選んでましたね。 課題はレイアウト。もっとB5にきれいに収めたい。 初心者さんおつかれさま。今週のイチオシフレーズ大賞です。 特別賞：馬から落馬賞（激しい激痛） イチオシフレーズ：「激しい激痛」×2 「睡眠中は無		

			敵」×2		
07	××な陽射し		3 pt	5 位	1 sp
			吸血鬼の最期。その悲しみが具体的な描写で伝わってきます。描写力、おみごと。そこをしっかりと読んでもらえてのブロンズ・メダルでした、おめでとう。タイトルが、ちょっともったいないかな。伏せ字にすると、読者は答えは何だろう？とそればかり気になってしまうので、内容に浸りきれない感があります。特別賞：××賞（××のインパクトが大きい）イチオシフレーズ：「×××がほしい」		
08	四季の朝		15 pt	2 位	3 sp
			わはは、うまいうまい。つねに朝は手の届かない存在なんですよ、と。なあるほど。リズム感がすばらしい。シルバー・メダル&最多特別賞ゲットでした、おめでとう。特別賞：ほんわか賞（字体）委員長のお好みなんで賞か？（いいんちょの私生活だから）ニートで賞（共感できる）イチオシフレーズ：「朝に嫌われ猫に好かれて」「昼夜逆転私生活」		